

エジプト神話と史実における近親相姦の問題（１） —神話編—

浜本 隆志 *

The Issue of Incest in Egyptian Myth and Historical Fact (1) :
Mythology

Takashi HAMAMOTO*

[Abstract]

It is common for the process of earth's creation to be described as heaven and earth separating out of a disordered state of chaos, not only in Egyptian myth, but also in the Book of Genesis, Indo-European origin myths, and even Japanese myths. In Egyptian myth, it is at that point that the god Atum appears, who himself gives birth to various gods. In mythology, when a god is considered to have both the masculine principle and female principle together, then although there is one body, it means that they possess both sexes, male and female.

At first, it seems like a strangely peculiar idea that out of chaos came forth gods possessing both sexes, and that these differentiated into female gods and male. But one can think of it as a condensed version of the endless evolutionary process of living things, where out of self-pollination in plants to self-fertilization in animals, the sexes are differentiated into male and female. In other words, the original form possessed both sexes and that differentiated as male and female. As a result, whether the anthropoid ape, ancient humans, or homosapiens, the male and female sexes were established in their position in human history.

However, another strange phenomenon in many myths is incestual marriage. Consanguineous marriages between the gods are spoken of repeatedly in mythology. For example, in Egyptian myth, the famous Isis and Osiris are married as brother and sister, and in Greek myth, there is the mother and child marriage of Uranus the sky god and Mother Earth Gaia and the sibling marriage of Cronus and Rhea. There are also the sibling marriages of Freyr and Freya of Norse mythology, and Izanagi and Izanami of Japanese mythology. In ancient Japan there was the practice of calling one's wife "little sister", which can be said to be a vestige of sibling marriage.

It is not only consanguineous marriages. In the Old Testament, in order to have children, Lot's two unmarried daughters made their father drink wine and had sex with him, each later giving birth to a child. Even though this kind of incest was, typically, considered taboo in everyday society, it is repeatedly played out in myth. And while consanguineous marriage and incest are similar concepts, strictly speaking the former means marriage that is part of a social system, while the latter is not marriage, but rather indicates the formation of a sexual relationship between close relatives whether by consent or by compulsion.

For earlier research on this issue there is Mr. Atsuhiko Yoshida's "Myth and Incest". In it, Yoshida widely references consanguineous marriage and incest as related to the gods, but in particular he offers up a famous

* 関西大学国際文化財・文化研究センター（研究員）
(Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture , Kansai University, Japan)

consanguineous marriage in Greek mythology as an example, namely, King Oedipus and his mother Jocasta who marry unaware of their mutual blood. But when the truth becomes known, the mother commits suicide and Oedipus pokes out his own eyes and becomes blind. Yoshida proposes that incest is inevitable behavior in the process that produces the destabilized state of chaos which disrupts order, whether at the origins and whether or not it's taboo. And after a new order is established, it is depicted as something condemned, even in myth.

To reiterate, these kinds of sibling marriages, marriages between mother and child and father and child, are played out in many mythologies almost universally, starting with the genealogy of the Greek gods and the Old Testament. Certainly, in the field of cultural anthropology, it is believed that the incest taboo widely, empirically existed from the prehistoric age. Moreover, because the taboo against incest exists even in the world of anthropoid apes and animals, we think that likely in homosapiens too, in many cases, this has been strictly kept as an unwritten rule since ancient times. Even so, for some reason, whether in myth or in historical fact, the occurrence of incest was limited to the gods and specific tribes called the nobility.

Even with the establishment of a new order, there is a close relationship specifically to paternal or patriarchal rule and the issue of divine succession. And together, consanguineous marriage and incest must be closely connected to monogamous and polygamous systems of marriage and to gender issues. In this paper, I would like to dig in and investigate these issues a little deeper using ancient Egypt as a case study. What I will deal with specifically is how consanguineous marriage is put forward within Egyptian myth, and the question of how that influenced the succession of divine progeny. Only I will also look at Greek myth as a case study and try comparing the two mythologies.

Moreover, we know that consanguineous marriages were common in dynasties just like we see in the history of ancient Egypt. For example, the great pharaoh Ramses II (reigned 1304-1237 BC) married three of his daughters. How these kinds of historical facts and the world of myth are related is a subject that should be given focus. In this paper (1), I will mainly discuss as a case study consanguineous marriages in Egyptian myth, and I will leave historical realities as the subject of the next paper.

1 はじめに

エジプト神話だけでなく、インド・ヨーロッパ系の原初の神話や日本神話でも、「創世記」は混とんとしたカオス状態から天地が分離し、世界が創造されるプロセスを語ることが多い。エジプト神話ではそこにアトゥム (Atum) 神が出現し、みずから神々を生みだした。神話では神が男性的特色と女性的特色をあわせもつ場合がみられ、これは体がひとつでありながら、男性と女性という両性を具有したものを意味する。

カオスから両性具有の神が生まれ、それが女性神と男性神に分化するという発想は、一見すると奇異で特殊なものとも思える。しかしこれは、植物の自家受粉から始まり、動物の自家受精から両性がオスとメスに分化する、生物の果てしなく長い進化過程を凝縮したものであると考えられる。すなわち両性具有は原初の形態であるが、そのオスとメスの性の分化の延長線上に、類人猿、旧人類、ホモ・サピエンスという人類史の男女の性の確立が位置づけられるのである。

ところが多くの神話において、もう一つ奇異な現象は近親婚である。神話では神々の近親婚の話が頻繁に語られる。たとえばエジプト神話では、有名なイシスとオシリスは兄妹婚をしており、さらにギリシア神話の天空神ウラノスと母神ガイアの母子婚、クロノスとレアの姉弟婚、北欧神話のフレイルとフレイア、日本神話のイザナギ、イザナミも兄妹婚である。古代日本において妻を妹 (いも) という言い方をしたが、これは兄妹婚の名残といえる。

近親婚のみだけでなく『旧約聖書』においても、ロトの二人の娘は結婚ではなく、子孫を残すために父親にワインを飲ませて関係し、それぞれ子どもを産む。このような近親相姦は、通常、日常社会ではタブーとされているにもかかわらず、神話の中で繰り返して展開されている。なお、近親婚と近親相姦は類似している概念であるが、厳密に言えば前者は社会制度的な婚姻を意味するのに対し、後者は婚姻ではなく、合意であろうと強制であろうと、近親間で性的関係を結ぶことを指す。

この問題の先行研究としては、日本では吉田敦彦氏の『神話と近親相姦』がある。ここでは広く一般に、神々に関する近親婚や近親相姦が論及されている¹が、とくに吉田氏はギリシア神話の有名な近親婚の例を取り上げている。すなわちオイディプス王と母イオカステはたがいの素性を知らず結婚するが、事実が判明すると母は自殺し、オイディプスはみずから目を突いて盲目になる。吉田氏は近親相姦が原初においてもタブーであったにもかかわらず、秩序を崩壊させカオスの混乱状態を生み出すプロセスで、これは不可避な行為であったとする。しかも新たな秩序が確立した後では、それは神話でも断罪されるものとして描かれるというのである²。

このような兄妹婚、母子婚や父子婚は、くりかえすがギリシア神話の系図や『旧約聖書』をはじめ、多くの神話ではほとんど例外なく展開されている。たしかに文化人類学の分野において、近親相姦の禁忌、すなわちインセストタブー (incesttaboo) は、先史時代から広く経験論的に存在したとされる。さらに類人猿や動物の世界でも、近親相姦の禁忌が存在することから、おそらくはホモ・サピエンスにおいても、多くの場合、古代からこれは厳しく守られていた不文律であったと考えられる。それにもかかわらず、

¹ 吉田敦彦『神話と近親相姦』青土社、1993年、9頁以下参照。

² 同上書 27頁以下参照。

なぜか近親相姦は神話においても史実においても、神々や王侯という特定の部族に限定されておこなわれていた。

これらには新しい秩序の確立といっても、具体的には父権制あるいは家父長制の統治や、神族の継承の問題が深くかかわっている。あわせて近親婚や近親相姦は、一夫一婦制と一夫多妻制という婚姻制度やジェンダーの問題とも密接に関与してくるはずである。本稿はこの問題について、古代エジプトの事例を中心にしてもうすこし掘り下げて検討してみたいと思う。ここで扱うのは、具体的にエジプト神話の中で近親婚がどのように展開され、神々の子孫の継承にどう影響したのかという問題である。ただしその際、ギリシア神話の事例をも検証し、両神話の比較をも試みしてみる。

さらに古代エジプトの史実においても同様に、王朝では近親婚が多かったことが知られている。たとえば最強のファラオ、ラムセス2世（在位、前1304–前1237）は3人の娘と父子婚をおこなったが、これらの歴史的事実と神話の世界がどのようにかかわっていたのかも注目すべき事項である。本稿(1)ではおもにエジプト神話における近親婚の事例を検証し、後者の歴史的事実は次稿の課題にしたい。

2 エジプト神話における近親婚

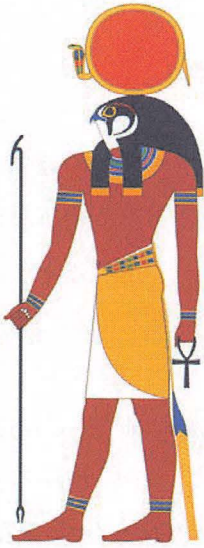
はじめに有名なエジプト創世神話の系譜をたどり、その中で近親婚の実例を確認しておこう。まず創造神アトゥム（太陽神ラーと習合）は両性具有であったが、通常、この創造神は頭に円形の太陽を載せ、ハヤブサのシンボルで描かれる。これは鳥が天空を駆け巡る神とのアナロジーから生まれたイメージである。

神話でも東から朝、アトゥム（太陽神ラー）は天空の船に乗り、空に上る。そして昼間は光輝きながら大地を照らし、その後、西方の夜の世界へ移動して消え、翌日、この移動のサイクルを繰り返す。太陽神ラーの運行は、天空のメカニズムだけでなく、生から死、そして再生という人間を含めた生命の永遠性をも示している。これは古代エジプトの根幹的な世界観であったが、その思想によれば、死者もミイラがあれば魂はその肉体に回帰することができる。次頁の絵でも、右（東）に太陽神ラーが船に乗って航行している宇宙観が描かれている。

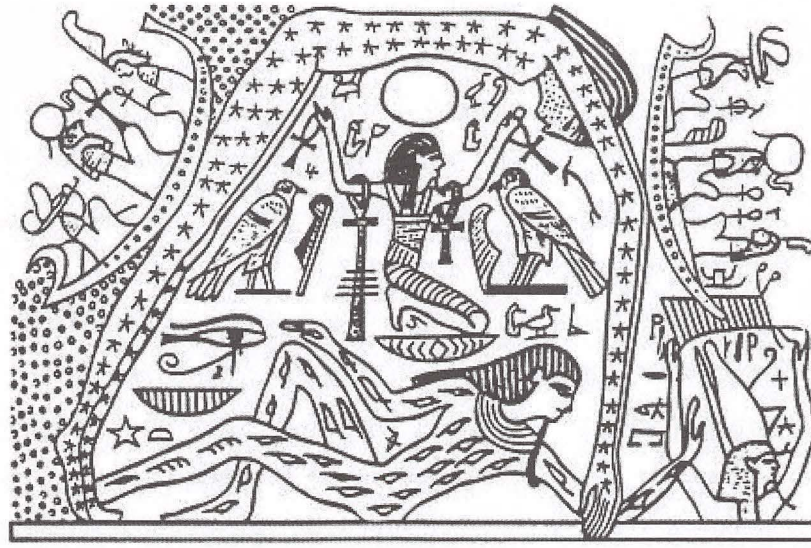
両性具有のアトゥムの子である湿気の神テフヌトは、大気の神シューと同じく兄妹でありながら夫婦であった。ここに近親婚の典型例がみられるが、同様にテフヌトとシューの子であり、地の男性神ゲブは、妹の天空の神ヌトと結婚して夫婦となっている。下図はこのような夫婦をめぐる神話の世界をも描いたものである³。

まず左に頭がハヤブサの姿をしたラー神を引用しておく（出典は <https://en.wikipedia.org/wiki/Ra#/media/File:Re-Horakhty.svg>）。これは頭に太陽のシンボル化した太陽神である。ラーはその右に描かれている図の右端の船に乗り、天空を駆け巡る。天空の女神ヌトは弓なりになり、手足を大地に付けている。その下に大地の男神ゲブが横たわっている。夫婦二人はここでは離れた姿で描かれている。

³ 大林太良・他編『世界神話事典』角川選書、2007年、373頁参照。



ラー神



天空の神ヌトと大地の神ゲブ

(<https://en.wikipedia.org/wiki/Ra#/media/File:Re-Horakhty.svg>)

(https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B2%E3%83%96#/media/File:Geb_and_Nut02.jpg)

この絵に描かれる以前の場面では、天空の女神ヌトは大地の神ゲブと一体化して交わっていたが、それは天空と大地が混んとしていた時代を暗示する。そこに大気の神シューが天空と大地の間に割って入り、交わっていた両者を引き離したとされる。これは兄妹婚が全面的に容認されていなかったというように解釈することが可能であるが、それよりむしろ天空と大地が定まってくると、一日のうち、夜は合体し、昼は離れるという一日の周期を表わしていると考えられる。

図では中央に4つのアंक（エジプト十字）をもった大気の神シューが描かれている。女神ヌトは、引き離されても、弓状の姿勢で両手両足を大地に付けており、その身体には天空の星印がちりばめられ、天空（天の川）を示す。仰向けになったゲブは穀物の穂先や葉をシンボル化した模様を付けている。

この図からも、当時のエジプト人の宇宙観を読み解くことができる。中央部の女神ヌトは上位に描かれ、その下に男性神ゲブが大地に横たわっている構図は、エジプト神話ではヌトが天空を支配し、宇宙の主導権を握っていることを示す。ここには後の男性神が天空を統括し、女性神が大地を司るという男性中心主義（父権制）とは逆の、女性上位ともいえるべき世界観が示される。

さて天空の女神ヌトと大地の男神ゲブのあいだに5人の兄弟姉妹が生まれる。そのうち兄オシリスと妹イシス、弟セトと妹ネフティスはそれぞれ、兄弟姉妹の間で近親婚をおこなった。その中で年長者相続の原則に従い、兄オシリスが王権を受け継ぎ、支配権をえるが、人徳のあるオシリスはだれからも愛され、王国を統治した。

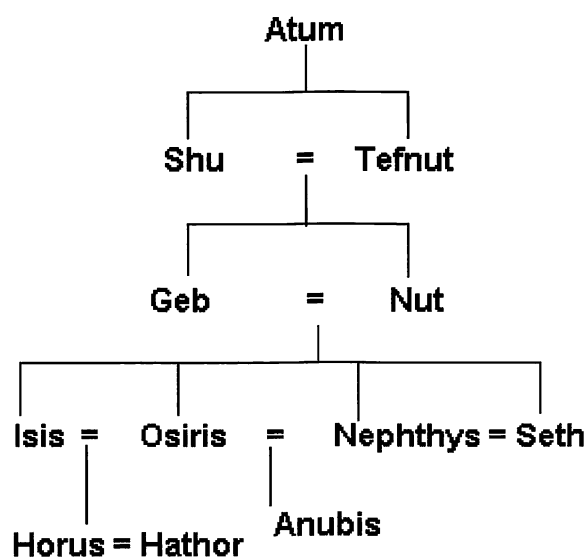
ところが弟セトが兄の名声に嫉妬して、不満を募らせた。野心をもったセトは王権を奪うため、共謀者とともに策略を用いてオシリスを箱に閉じ込め、封印してナイル川に流す。兄弟げんかは神話ではよくある事例であるが、これも支配をめぐる兄弟の争いの典型例である。セトが兄オシリスを殺害する話は、

『旧約聖書』の農耕民の祖カインと牧畜民の祖アベルが兄弟げんかをして、兄カインが弟アベルを殺害する展開と類似しているといえる。

さてオシリスとセトの神話伝承⁴についてはテキストによって異なるが、「ピラミッドテキスト」では、夫オシリスを殺され嘆き悲しんだイシスは、ナイル川のアビュドスに近いネディトでオシリスの遺体を見つけ、それをもとに復元して、魔法によって永遠の生命を与える。そしてセトに復讐をするために息子を産む決心をする。その結果、生まれたのがホルスである。

しかしギリシア人歴史家のプルタルコスによると⁵、兄を殺した弟セトは遺体を14に切り刻んでナイル川に棄てるが、14番目の遺体の一部がペニスで、それはワニに食べられてしまう。イシスは、散逸した遺体を集め、ここでも魔術を使って蘇生させるけれども、生殖に最も重要なペニスを欠いていた。ある説ではイシスが粘土でペニスをつくったとか、別の説ではイシスは男性（ペニス）無しでとかいわれるが、ホルスを身ごもり、出産することになる。この伝説はキリスト教における聖母マリアのキリスト出産につながり、あの「無原罪のお宿り」の教義とも深くかかわってくるのである。

ペニスを欠いたオシリスは、現世では王位につかずに冥界へ下りていき、黄泉の国の支配者となる。そこで弟セトはオシリスから王権を奪い、支配者として君臨するが、オシリスの妻イシスが生んだホルスは、やがて成人に成長する。こうしホルスは父の復讐をすべく、叔父のセトに戦いを挑む。セトはホルスが庶出であることを理由に、王権を継承する資格がないと反論する。しかし王権は女性を通じて継承されるので、女神イシスの子ホルスは神々によって正当な後継者とみなされ、結局、セトを打ち破り、エジプトの王位に就くのである。この神話における王位継承のルールは、女系であることがきわめて重要である。以上の経緯を家系図に示すと下記のようなになる（出典は <http://www.gods-heroes-myth.com/egyptian.GIF>）。



古代エジプト神話の系譜図
<http://www.gods-heroes-myth.com/egyptian.GIF>

⁴ マイケル・ジョーダン、松浦俊輔訳『世界の神話』、青土社、1996年、297頁以下参照。

⁵ 大林太良・他編『世界神話事典』角川選書、2007年、376頁以下参照。

2 女神イシスの権威

エジプト神話の中で、女神イシスほど大きな役割と影響力を与えたものはない。イシスはオシリスの妻であったが、夫オシリスの失踪を嘆き、涙を流す。それはナイル川の増水と関連づけられた。また天空のシリウス星の化身とされたり、万物の女神でもあったりした。バーバラ・ウォーカーは『神話・伝承事典』の中で、イシスについて次のように述べている。

イシスは、エジプトの玉座であった。ファラオたちは、彼女の膝の上に座し、彼女の腕と翼によって守護されていた。イシスの冠についていたシンボルは「玉座の土台」の意のムアトmu'atであり、ムアトはイシスの分身であるマートをも表わしていた。マートは、「公正」、「正義」、「真理」または「万物照覧の目」などと呼ばれる母性原理であった⁶。

そのことを示す絵が残されている(出典は <https://en.wikipedia.org/wiki/Isis>)。全能の女神イシスは赤い鉢巻を巻き頭に玉座をしつらえ、両手にトビの羽根を広げて天空の世界を支配している。後にホルスの妻ハトホル神の代わりとして、雄牛の角と太陽をシンボル化したものを頭にかぶる図も残されている。たしかにこれらのシンボルは、結果的には強大なイシス信仰を示すものであるが、その人気の根源は女神の献身的なオシリスへの愛と、息子ホルスを産み慈しんだ母性的な姿にあった。



羽根を広げる女神イシス（前1360年ごろ）
(<https://en.wikipedia.org/wiki/Isis>)

⁶ バーバラ・ウォーカー『神話・伝承事典』山下主一郎・他訳、大修館書店、1990年、366頁以下。

以上のイシスは妻であり母であるという原点の意味において、古代エジプトの中ではクローズアップされるが、女神はさらにエジプト人にとって、「上下両エジプトの王権を司る女王」⁷でもあった。したがって、イシスがエジプトにおける史実のファラオの継承者にとっては、きわめて重要な役割を与えることになる。ファラオたちはイシス神とのかかわりを、王権の正当性を示す証拠にしたのである。歴史上に存在したファラオの近親相姦も、女神イシスの視点から考察すれば、新たな解釈の可能性を示唆することができよう。

先述のように、イシス信仰は地中海地方やヨーロッパではキリスト教のマリア信仰へ継承された。イシス神話はキリストの誕生ときわめて類似しており、両者とも男性と性的交わりをせずにも子ども産むことを示している。すなわちイシスが聖母マリアで、ホルスが幼子キリストというアナロジーが想定される。

しかもエジプト神話では、ホルスが王権の正当な継承者となっており、キリスト教でも幼子イエスが後に神の正当な継承者となる。すなわちここでは男性神が継承者であって、いずれも父権制の原理がすでに暗示されている。ただしエジプト神話では、ホルスが正当な王権の継承者という意味において重要視され、宗教的な意味においてはほとんど考慮が払われていない。



ホルスを抱くイシス

キリストを抱く聖母マリア

(https://en.wikipedia.org/wiki/Osiris_myth) (https://it.wikipedia.org/wiki/Madonne_di_Raffaello)

その後、エジプトでも歴史的に男性神が優位となり、同様に史実でも男性のファラオが強大な権力を持ち、父権制によって統治がおこなわれるようになる。その際、女神信仰が父権制とどのような関係にあったのかが気になるところである。いずれにせよ想定されるのは、神話時代から古代王朝の確立のプロセスで、権力の継承をめぐる、男女の主導権の逆転現象があったことである。これを確認するために、神話における女系相続と父権制の問題をみておこう。

⁷ 同上書 366 頁。

2.1 神話における女系相続の問題

神話の成立について考えてみると、どの地域でも古代において支配権力の成立（王朝）と深い関係にあった。神話は支配権力の確立の後、生みだされるのが原則である。すなわちそれは支配の正当性を神話によって実証しようとしたからである。したがって神話の本質を考察する場合、この原点をたえず念頭に置いておかねばならない。本論のテーマの近親相姦もたんなる興味本位ではなく、ファラオの継承プロセスと深くかかわる問題が内在していたといえる。

たとえばバーバラ・ウォーカーの『神話・伝承事典』では、母系相続について次のように述べられている。

新石器時代には、母系の氏族制度と母権の支配がほとんどすべての地で実施されていた。エジプトの古い書物には、自分自身と家庭を完全に支配し、母から娘へと伝わる財産をもつ女性が描かれている。……「婚姻」matrimony は「家督」patrimony の女性形に相当する意味があった。すなわち母方の財産の相続を意味した。その matrimony が、結婚と同義語になったが、その理由は結婚が、男にとって財産の支配権を獲得する一つの方法であったからである⁸。

そうすると神話や王侯の近親婚は、性の問題というよりは、むしろ神々の正統性や王侯の血の純粋性、財産の維持、王族の結束のためという考え方が主流を占めていたからではないか。フレイザーは『金枝篇』の中で、王位の血は王妃を介して子に受け継がれるので、王妃が死ぬとその娘を介して継承がおこなわれたという。

王と王妃の結婚が終結すれば、王位に対する彼の権利も共に消滅し、王位は直ちにその娘の夫に譲渡された。したがって、もし王が妻の死後も統治することを欲すれば、合法的にそうすることのできる唯一の方法は、自分の娘と結婚することによって、以前は彼女の母親を通して彼のものであった王権を、今度は彼女を通して延長することのほかになかった⁹

これは女系相続の例であるが、フレイザーの指摘は、筆者の前稿「古代エジプトにおける『シンデレラ物語』の世界伝播（2）」（2015年）¹⁰で、「白雪姫」の一連の類話の近親相姦願望と符合する慣習である。したがって「白雪姫」の類話でも、王が娘との結婚を望むのは、性の問題ではなく王権の継承のためであったことがわかる。ところが、この女系相続はその後、父権制によって男系相続の併用期を経て、結局、前者は廃止されるようになる。ウォーカーは同書でこういっている。

⁸ 同上書 503頁以下。

⁹ フレイザー『金枝篇』（3）永橋卓介訳、岩波文庫、1994年、24頁。

¹⁰ 浜本隆志「古代エジプトにおける『シンデレラ物語』の世界伝播（2）」The Journal of Center for the Global Study Volume 3, Kansai University

何世紀もの間、エジプトでは、妻によって始められ、妻の意志によってだけ終わらせられる、旧式の母権制の結びつきと父権制の結婚が並んで存在していた。……父権制の宗教の権威者たちは、財産を男の手に置くために、いたるところで古代の母系相続制度を変えていった¹¹。

神話や史実においてこのような女系相続がおこなわれていたとしても、それが母権制を前提としていたという断定は困難である。バツハオーフェンが『母権論』で展開した、人類史における母権制から父権制への転換¹²という単純な定式化は、これまで実証されていない。女性が支配権力を有していたとする母権制の時代はなかったというのが現代の定説であるが、しかし女神信仰にもとづく女系相続の時代はあったといえる。

ところが父権制の時代においては、かつての女系相続にも変化が加えられていった。たとえば記録に残るギリシア神話においても、すでに父権制の時代を迎えていたので、女系相続ではなく男神相続のかたちをとっていた。このような転換は何に起因するものであったのだろうか。それは農耕や牧畜、遊牧などの生活スタイルとの関係を見ておく必要がある。

図式化すれば、先史時代の農耕民は大地を、ものを生みだす根源とみなし、地母神信仰や女神信仰を育んできた。したがってナイル川の恩恵を受けていた古代エジプトにも、女神信仰があったのは当然といえよう。エジプトのイシス信仰もその系譜の中へ位置づけられる。しかし紀元前 1650 年ごろには、エジプトはセム系の遊牧民のヒクソスに一時期支配される。さらにラムセス2 世時代には、遊牧民国家ヒッタイトとの長年にわたる戦争を経験してきた。これらの遊牧民は、父権的一神教のイデオロギーによって、エジプトの女神信仰を父権的な男性神に置き換える作用をおよぼしたはずである。

古代ギリシアにおいては、古代エジプトよりも早く父権制が浸透していたと考えられている。すでに紀元前 2,200~2,000 年ごろから、インド・ヨーロッパ語族はドナウ中流域やバルカン半島に侵入し、牧畜生活を開始していた。かれらはギリシア先住民の文化、とくに母神信仰を破壊し、男性中心の原理を打ち立てた。牧畜、遊牧社会では男性の力による統率を必要とし、家庭・社会は必然的に父権制をとったからである。したがって有名なギリシア神話は、父権的な特色をもつとされる。

このような前提の下で、古代エジプト史と近親相姦とのかかわりをみる前に、ここでギリシア神話の近親婚と近親相姦の事例を確認しておこう。

3 ギリシア神話における近親婚と近親相姦

ギリシア神話の古い原初の神々は、ティタン（巨人）神族と呼ばれ、その家系では、カオスから生まれた天空神ウラノスと大地の女神ガイアは兄妹婚をする。その子クロノスと地母神レアも兄妹婚、あるいは母子婚をしたとされる。さらにその子ヘラとゼウスも姉弟婚という、三代重ねて近親婚を繰り返している

¹¹ バーバラ・ウォーカー、前掲書、503 頁。

¹² J. J. バツハオーフェン『母権論 1』岡道男・他監訳、みすず書房、1996 年、44 頁以下参照。

このようなゼウスの近親相姦がギリシア神話の特色であるが、その際、男性神が支配権を継承している点を見過ごしてはいけない。ギリシア神話のオリュンポス神族の系譜は、エジプト神話と違って、先に触れたように男性神優位になっている。すなわちギリシア神話の場合、父権制の世界観が展開されていたが、エジプト神話の天空の女神ヌトと大地の男神ゲブは、ギリシア神話と反対の関係にあり、男性神と女性神の逆転現象が起きていたことになる。



オリュンポス 12 神のなかで君臨する主神ゼウス
(<https://commons.wikimedia.org/wiki/>)

さらにギリシア神話においては、ティタン神族における近親婚だけでなく、キニュラスとミルラの父娘婚、オイディプスとイオカステの母子婚など、頻繁に近親相姦の事例がみられる。その中の父娘婚は父権制の時代を、母子婚は「母権制」の時代を背景にしているといわれている。しかしオイディプス神話が物語るように、近親相姦の結末は悲劇や葛藤を引き起こすことが多い。

たとえばその典型例はオイディプス神話が物語る通り、ギリシア神話の悲劇がここに始まるのである。この家系図を見て、近親婚は王権の正当な継承者のためという説は成り立たない。一夫多妻制を見せつけ、ゼウスは神々の権力が拡散しないように、他の者とも結婚封じをしていたように思われるのである。

総論的にいえば、近親相姦は自然の嵐に似てこれまでの仕組みを破壊し、新しい体制を作るためには必要であった。しかし一度秩序ができあがると、そのあとは異常なものは神々の世界から排除され、抹殺されるのである。ここに近親相姦の秘密が隠されている。たしかにゼウスは全能の神として生き延び、オリュンポス神族は繁栄していったからである。

以上のように神話における近親相姦は極めて重要な意味をもっていることは、ここからも理解できよう。次回にはこれらの神話を踏まえながら、エジプトの史実の近親相姦の意味を考察したいと思う。（この稿続く）

本研究は、「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 25 年度～平成 29 年度）」によって行われた。